

2013年6月28日 田村将人講演会 要旨

『サハリン先住民族のたどった戦後

—樺太アイヌ、ウイльта、ニヴフの〈引揚げ〉と〈残留〉について』

文：田村将人（札幌大学特命准教授）

サハリン先住民族のうち、樺太アイヌは近世より和人（日本のマジョリティ）との関係が深かった。一方、サハリン中北部に居住するウイльтаやニヴフなどの先住民族は、1905年に北緯50度線に国境が引かれたことによってロシア・ソ連領と日本領とに居住地が分断された。樺太庁はアイヌ以外の先住民族約400人のうち半数を敷香（現・ポロナイスク）近郊の「オタスの杜」に集住させ、日本語による教育など日本化政策を行った。ウイльтаやニヴフは、樺太アイヌとは異なり一度も日本の戸籍に編入されることはなかったが、一部の男性は日本の陸軍特務機関によって非正規に徴用され、さらに戦後になるとソ連によってシベリアに連行された（シベリア抑留中に死亡、日本へ移住、故郷へ戻る者に分かれた）。彼らが突然行方不明になったため、ソ連側から日本のスパイと目された親族には動揺が広がり、再会を期待して日本へ〈引揚げ〉る者、朝鮮人男性と結婚するなどソ連施政下での生活が始まった。なお、〈残留〉した形になる先住民族には1962年までソ連の市民権が与えられず、移動の自由、進学
の機会が制限されていた。

戦後、樺太アイヌが先住民族にとっての〈故地〉サハリンを離れて日本へ〈引揚げ〉た理由には、生活の日本化（教育、結婚、仕事など）、出征した家族との再会、また社会主義体制への嫌悪などが挙げられる【田村将人2008「樺太アイヌの〈引揚げ〉」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、pp. 463-502】。一方、ウイльтаやニヴフのうち約50人が日本へ〈引揚げ〉た理由には、シベリアに抑留された男性と家族が再会を模索したことが付け加えられるが、大部分の人は〈残留〉した。他方、朝鮮人やロシア人は引揚船に乗れなかったことから、彼らと結婚した和人や先住民族の女性には〈残留〉した者が多い。なお、〈残留〉者の中には、先に日本へ渡っていた親族に呼び寄せられて1950～70年代に日本へ〈帰国〉した者もいた【田村将人2013「サハリン先住民族ウイльтаおよびニヴフの戦後・冷戦期の去就—樺太から日本への〈引揚げ〉とソビエト連邦での〈残留〉、そして〈帰国〉—」蘭信三編『帝国以後の人の移動ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』勉誠出版：pp. 209-248】。